

IRATSUME 20号に寄せて

宮武 頼夫 (大阪市立自然史博物館)

1977年の春に創刊された「但馬むしの会」の会誌“IRATSUME”が、今号で20号を迎えるという。二十歳にも通じることで大変にお目出たく、心からお祝いを申し上げる。毎年1回の発行で、時には合併号もあったが、無事今日まで発行が続けられてきたことは、編集者をはじめ関係者の方々の努力の賜と、敬意を表したい。多少エッセーやあいさつ的な文章も入るが、通算267編の報文は堂々たるもので、但馬地方の昆虫や生き物についての知見を得るには、必見の定期刊行物となっている。

IRATSUMEは創刊号から拝見しているが、いつも見るのが楽しみである。足立氏の麗筆になる表紙の絵が、今度は何の虫になっているかなと楽しみだったり、すっきりとして読みやすい誌面づくりのせいもあるが、やはり地元の但馬という地域への「こだわり」が、些細な記事であっても、魅力になっているからだと思う。但馬の虫に関する新しい発見や調査記録は、自分の胸の中にしまっておきたいけれど、やはり仲間には知らせたい、という気持ちが記事に表れているので、なんとなくワクワクしながら読むことになる。但馬むしの会は但馬地方の昆虫の研究(昆虫相の解明)と会員相互の親睦を目的としているが、会員全部がなかなか一堂に会する機会がないということになれば、このIRATSUMEが大きな役割を果たしているのはまちがいない。

これからの但馬むしの会のみなさんに望むところは、とことん但馬の虫に(場合によっては但馬の自然にといってもよいかも知れない)こだわりながら、活動を続けていって欲しいということである。会員の方々は、但馬の虫が好きで、また、虫好きな仲間が欲しくて会員になっておられると思うが、結局のところ、自分たちがずっとつき合って慣れ親しんだ但馬の虫たちが、また、数々の珍しい但馬の虫たちが、ずっと生き続けていて欲しいと願う気持ちを根底に持っているのではないだろうか。そのためには、虫たちが生息する自然環境が、破壊されずに残されなければならない。昨今、地球規模での環境破壊が問題になり、「人と自然の共生」が叫ばれているが、自分が住んでいる地域の、身近な昆虫や生き物に愛着を持ち、なんとか守っていききたいという気持ちが原点であり、最も大きな力になると思う。このような取り組みが各地でなされたら、虫たちは安心して棲むことがで

き、多様な自然環境を残すことで、人間自身にとっても、物質的に、精神的に豊かな環境が確保されると思う。このような視点から、但馬むしの会の会則の目的の項に、「但馬の虫を守ること」という一文を是非入れて欲しい。

ただ、最近では但馬地方の虫屋さんも、都会に出て働いたり、学校へ行っている人が多く、地元で活動できる人が減っているのが悩みだと聞いている。しかし、このような問題は根本的にはなかなか解決するのは難しく、ある程度仕方のないことである。地元を離れている会員も、できるだけ故郷の但馬へのこだわりを持ち続けて、年に一回は訪れて、地元の仲間と行動をとものにしたり、話し合ったりし、調査・採集活動などで得られた成果は、細かなことでもIRATSUMEに書くようにしたらよいだろう。会員の年齢層も確実に上がってゆくが、昆虫とのふれあいも生涯学習の一端と考えて、熟年層の人たちの腕のふるいどころもあってよいと思う。一方、後継者を育てる努力は重要で、高校生・大学生だけでなく、小学生・中学生を含めた年齢層の人たちに地元の自然のすばらしさを教え、それを次の代に残してゆく意義を伝えなければならない。最近では、豊岡市の中学生の宮垣友洋君が入会して、19号にチョウやトンボの報文を2編投稿されているのは、嬉しいことである。友達に虫好きな人がいたら、ぜひ誘って欲しい。また、会員に学校の先生がいたら、積極的にクラブの生徒や担任の生徒たちに、虫のおもしろさを伝えて、会の活動にも一緒に参加して欲しいと思う。そのためには、初心者の人たちを対象とした観察会や採集会もする必要があるかもしれない。地域での活動としては、公民館や学校などで、昆虫の写真展や、標本なども使った展示会をして、地元の自然のすばらしさを紹介することもできる。そんなことまでしなければならなくなると、今までの会の雰囲気とは違ってくるなあ、と思う人もいるかもしれないが、今あちこちの昆虫同好会では、一種の転機を迎えていて、会の活動を存続しようと思えば、いくつかの発想の転換が必要になってきているのではないだろうか。どんな風に転換するのか、みんなで話し合ってみて欲しい。

但馬むしの会の会員には、クモや水生昆虫の専門家がいたり、それらの生き物が好きだったりする人たちが何人もいて、他の会では見られないユニークな幅の広さを

持っている。先に述べたように、地元の自然へのこだわりを持ち、地元の自然を守ってゆくためには、チョウやトンボだけでなく、いろいろなグループの生物が好きな人が多くいた方が心強い。これからも、虫だけでなく植物にも強いとか、好きだという人たちに積極的に加わってもらった方がよいだろう。地震との関連だけではないが、地質や化石が好きな人でも、地元こだわりの人なら、巻き込んで虫も好きになってもらうと、違った角度から

地元の自然を見る目が育つだろう。願わくば、会の拠点になる博物館施設（学芸員などいる）などが欲しいところだが、当分は竹野にある但馬自然史研究所を、仲間同士の情報交換や刺激を得る場所として活用して欲しいと思う。今後、但馬むしの会の活動が益々発展し、充実した内容のIRATSUMEが続いて刊行されてゆくよう、心から願っている。

解消されない問題

高橋 匡

IRATSUME No.10に『「但馬むしの会」10年の歩み』と題して所感を書いてから、すでにもう10年が経ってしまった、というのが実感である。

前回も後継者の問題に触れたが、10年後の現在もいっように問題は解決していないように見える。確かに永幡君らも加わって、一見活気を呈しているようにみえている。しかし、実態はいよいよ深刻さを増しているというのが本当ではないだろうか。人はやがて結婚して子供をもつようになる。その子供の成長に無関心な親などはあり得ない。いずれ本会への関わり方にも変化を生じざるを得ない。その時に現在の役割を誰が引き受けてくれるのか、それを思うと暗然とならざるを得ない。一人一人が好きなことを勝手にやっているうちはよい。それをまとめて会誌にしたり、会の運営に心を注いでくれたりする人達がいなければ、会は雲散霧消してしまうばかりである。確かに黒井さんや山本さん達によって20周年は迎えられた。しかし、その後はどうなるのであろうか。後継者がなければ、自然消滅すればよいのか。誰もそうは考えないだろう。犠牲的精神とか責任感とかいう言葉が通用する時代が去ったとは考えたくはないが、もう少し楽しんでそういう役を受けるというくふうはできないのであろうか。来年の1月3日の総会には、何とか若い後継者が得られるような議論がぜひ必要であらうと思う。ネコに鈴をつけるネズミの会議のようにならないことを切に希望する。

昆虫少年を育んだ故郷の野山

磯野 昌弘

「但馬の自然」ということを考えた時、多くの人は扇ノ山や蘇武岳といった原生的な状態を多く残した地域を思い起こすに違いない。しかし、残念ながら、私はこうした素晴らしい但馬の自然にあまり興味を示さないまま、但馬を離れることになってしまった。私が慣れ親しんだフィールドは、浜坂町の宇都野神社の森であり、岸田川の河川敷に広がる草原であり、観音山や城山といった人里の身近な自然であった。私には、珍しい虫を採りたいという志向はほとんどなかった。こうした私の志向は虫を始めるにあたっての動機と深く関わっている。

虫採りといえば、子供の頃の夏休みの宿題と決まっていた。そんな少年時代を過ごし、高校生になった頃に抱いた「これまで、虫採りといえば、夏だけだったけど、他の季節にも虫はいるよな。そして、自分が少年時代に慣れ親しんだフィールドには、1年間を通して調べてみたらいったいどれだけの虫が生息しているのだろう。よし、自分の住んでる町にどれだけの種類の虫がいるのか調べてやろう」という単純な思いが、私を虫の世界へと誘っていった。それからというもの、3日とあけず、ピーティングネットを片手に近くの野山をかけ回った。今から思えば、同じフィールドに日参して虫を採り、観察し続けることが私のすべての出発点になったと思う。虫にも、それぞれ棲み場所や木の種類に好みがあったり、出てくる時期が決まっていたりするんだということを、そういった体験の中で肌で実感していくことができた。幸いにして、虫の研究で飯を食べていけるようになった今も、ここぞと決めたフィールドに足繁く通って、